

陽光

赤花
猫柳
☺

Contents

- 知って得する!「補聴器購入費用の助成」
- こどもの神経発達症(発達障害)について
- ピンクリボンホリデー2024開催報告
- 第39回がん征圧新潟県大会開催報告

令和7年1月20日 発刊 No. **38**



公益財団法人新潟県健康づくり財団
Niigata Health Foundation



知って得する！「補聴器購入費用の助成」

日本臨床耳鼻咽喉科医会 理事
新潟市医師会 副会長

大 滝 一

補聴器を購入する際の助成制度をご存じですか？

皆さんは日常生活の中で「きこえにくい」と感じたことはありますか？テレビのボリュームが大きくなった。お子さんやお孫さんの話が聞きとりにくくなった。電子レンジや体温計の音が聞こえにくくなってきた。繰り返して聞くことが多くなった。「あー、そういえば、このところ聞こえにくいなあ」と日常生活において不便を感じている方も少なくないと思います。

病気は早期発見、早期治療・対処が大切です。同じことがきこえに関しても言えます。難聴の原因はいろいろありますが、聞こえにくいと思ったら、まずは耳鼻科を受診して聴力検査を受けることをお勧めします。

聞こえにくいのは年のせいと放置していませんか？年とともに徐々に聞こえにくくなる加齢性難聴は治療が困難な場合がほとんどですが、放置すると難聴が進行するだけでなく、認知症やうつ病になるリスクが高くなることが近年の研究で分かってきました。最近ではテレビで近藤真彦さんが出演して「聞こえにくくなったら耳鼻科で聴力検査を受けよう」というコマーシャルが流れています。

検査の結果、必要があれば補聴器を着けることで快適な生活を送ることができますし、認知症やうつ病の発症や進行の予防にも繋がる可能性があります。難聴のお子さんの場合は補聴器が言葉の発達や学習において欠かせない重要なアイテムとなります。

補聴器を着けるにあたっては新潟県内の全ての市町村において購入費用の助成があります。主に3つありますので、この3つについて触れ、これから補聴器をと考えている方の少しでもお役に立てればと思います。県内の全市町村で3つも助成制度があるのは国内では新潟県だけです。新潟県の難聴者はある意味では恵まれているといってもよいかもしれません。

3つの助成制度について

まず、耳元で大きな声で話して、なんとか聞き取ることができるような高度・重度の難聴の方には、年齢を問わず1948年度（昭和23年度）から身体障害者総合支援法という制度があり、全国一律に助成が実施されています。難聴の程度で等級があり、等級ごとに購入費用の助成がなされ、上限はありますが補聴器の購入費用の9割が国と都道府県から支給されます。音による聴力検査の他に、語音を用いた検査を行う場合もあり、その結果をもとに耳鼻咽喉科医に意見書を書いてもらう必要があります。

これとは別に全国で2008年（平成20年）頃から、18歳未満で日常会話に不便をきたすような中等度の難聴、小さな話声が聞きとりやすい軽度難聴のお子さんにも、言葉や学習という大事な点から助成がなされるようになりました。新潟県でも2013年春から制度化され、毎年50名前後のお子さんたちが助成を受けて補聴器を着けています。なお助成は、県と市町村からそれぞれ費用の3分の1ずつが助成され、残りの3分の1が自己負担となります。ただし具体的内容が市町村で異なる場合がありますので、詳しくは各自自治体にご確認ください。

この2つの助成制度により18歳未満においては、たとえ軽度でも難聴があればだれでも助成を受けて補聴器を着けることができるようになりました。画期的なことと思います。

そこで問題となるのが残る18歳以上の軽度・中等度難聴者への対応です。これが新潟県においては3つ目の助成制度となります。

今、日本は高齢化が世界で最も進んでおり、それに伴う認知症の増加が社会的に大きな問題となっています。そこに2017年に世界的権威のある医学雑誌で「難聴と認知症・うつ病」に関する記事が掲載され、それ以降は日本も含め世界的に中高年の軽度・中等度難聴者と認知症、それに関連した補聴器の効果について多くの調査結果が報

告されています。

新潟県では全国に先駆けて、中高年の軽度・中等度難聴者への助成制度を2023年7月から県内の全市町村で「新潟プロジェクト」と銘打って実施しました。これが全国に広まり、助成実施自治体が国内で急増しています。

世界と日本の補聴器事情と最近制度化された「新潟プロジェクト」の詳細を以下に報告します。

世界と日本の補聴器事情について

まず、難聴の方がどの程度補聴器を着けているかという普及率を比べてみましょう（図1）。デンマーク、イギリス、ノルウェー、フランスなどのヨーロッパ諸国は50%前後となっていますが、日本は15%程度にとどまっています。また購入費用の助成を受けて補聴器を購入した人の割合は、ヨーロッパ諸国が90%ほどであるのに対し、日本はわずか8%という低さでした（図2）。その理由は表1を見ていただければ一目瞭然です。難聴者に対する助成制度に大きな相違があるからです。

まずヨーロッパでは助成の対象が軽度難聴以上となっていますが、日本では70dB以上の高度難聴

者に限られており、かなり基準が厳しくなっています。さらに助成額がイギリスやデンマークでは両耳に対して必要な補聴器の購入費用の100%が助成されています。しかし日本では基本片耳だけで助成額も低くなっているのが現状です。このような違いから普及率が異なっていると思われます。日本は医療先進国と自他ともに認めていますが、難聴者に対する福祉施策はヨーロッパなどに比べると極めて低いレベルとってよいかと思えます。

新潟県における助成制度「新潟プロジェクト」の立ち上げと経過

そこで新潟県では2019年4月に「新潟プロジェクト」を立ち上げ、今まで購入費用の助成がなかった成人の軽度・中等度難聴者に助成をとという活動を始めました。全国的にみても初めての活動で不安もありましたが以下のような目標を掲げました。

まず2024年までの5年間で、新潟県内の全市町村で助成を実施、2029年までの10年間で全国の47都道府県において最低一つの市町村で助成実施、全国の1,741市区町村のうちの500で助成実施とい

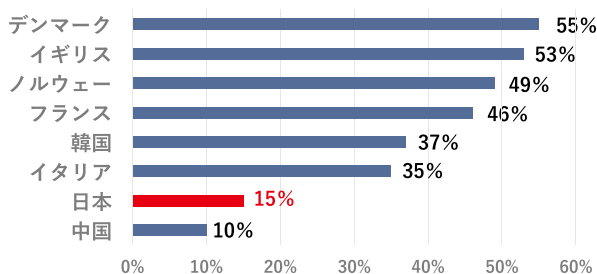


図1 世界各国の補聴器普及率

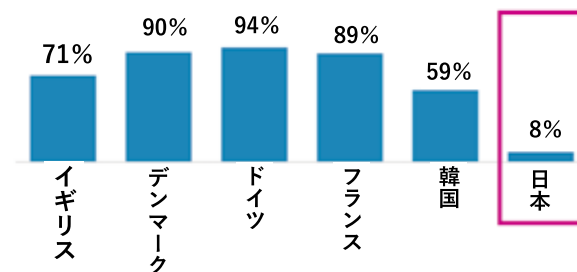


図2 助成を受けて補聴器を購入した割合

表1 各国の助成制度の内容

	助成	対象
イギリス	両耳100%	軽度難聴以上
デンマーク	両耳100%	軽度難聴以上
ドイツ	片耳10万、両耳20万	軽度難聴以上
フランス	片耳13万、両耳27万	軽度難聴以上
韓国	片耳14万、両耳28万	両耳60dB以上・他
日本	片耳4.2万～13.7万	両耳70dB以上・他

(2023年4月時点)

うものです。

2019年7月に県内の市町村にまず文書で助成の主旨とお願いをしましたが、一切連絡がなく全く反応がありませんでした。そこで文書では限界があると思い、市町村に伺って説明とお願いをすることにしました。市町村長との面談をお願いしましたがそれは叶わず、担当職員との面談となりました。図3のように8月の5日間で23市町村を訪ねました。

その甲斐があって2020年には三条市、阿賀野市、聖籠町、刈羽村の4市町村で助成が始まり、その後も文書でお願いを続けたところ2021年には新たに7自治体で助成が始まり11市町村となりました。そこで2021年夏に2度目の市町村訪問を行いました。この時は19の市町村を廻り6人の市町村長と面談ができました。

その結果、2022年には新潟市も含む26自治体で実施され、2023年7月には最後に残った長岡市でも助成が始まり、最初の目的である県内全ての市町村での助成実施が達成されました。

ただし、助成対象者は表2のように年齢で限定されているところもあり、また助成額も5万円が最も多いものの十分とは言えないのが現状です(図4)。今後これらを如何に改善していくかが重

要と考えています。

表2 市町村における助成対象年齢

年齢	市町村
18歳以上	下記の7市を除く23市町村
50歳以上	三条市、小千谷市、南魚沼市
50～74歳	新潟市、長岡市、見附市、糸魚川市

新潟県での助成の実態

ここで新潟県内の18歳以上の2022年度と2023年度の助成を受けた方の人数を図5に示しました。2022年度は26市町村で1,719人、2023年度は30市町村で2,189人でした。加齢に伴って難聴者が増える70歳代、80歳代が多くなっています。ただ18歳から50歳代までの学生・就労世代の方もおり、年齢制限のある市町村には対象年齢の見直しをお願いできればと思っています。

また、これは新潟市のデータですが、2022年に助成を受けアンケートに協力いただいた170人の調査結果では(図6)、助成後1年目に74.1%と多くの方が毎日補聴器を使用していました。これに

- 8月14日(水) 糸魚川市、妙高市、上越市、津南町、十日町
柏崎市、刈羽村
- 8月15日(木) 湯沢町、南魚沼市、魚沼市、小千谷市、長岡市
- 8月20日(火) 村上市、胎内市、新発田市、聖籠町
- 8月21日(水) 阿賀野市、五泉市、田上町、加茂市
- 8月22日(木) 見附市、燕市、弥彦村



図3 1回目の市町村訪問：23市町村

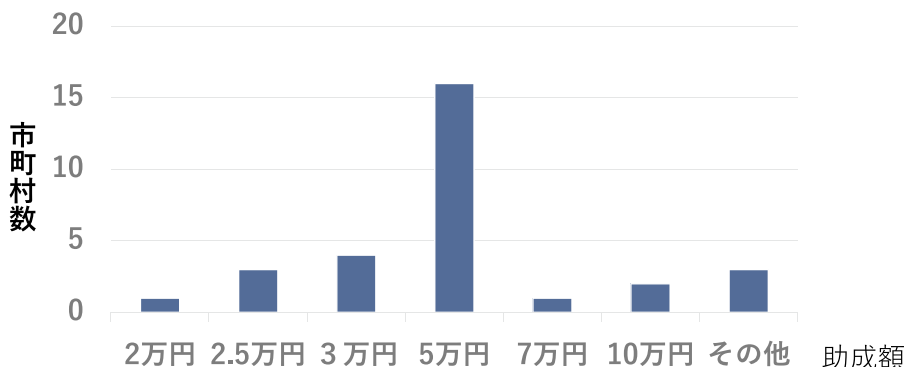


図4 助成額と市町村数(上限額)

週に数日使用、必要時使用を加えると96.5%となり、助成1年後もほとんどの方が補聴器を使用しているという結果でした。助成を活用して購入した補聴器が難聴者の日常生活に役に立っていることが明確となりました。

「新潟プロジェクト」の全国への拡がり

新潟における助成活動を2022年5月の全国学会で発表したところ、日本耳鼻咽喉科学会から注目されることとなりました。学会でも「国民に難聴に関する啓発を」と考えていた時であり「新潟プロジェクト」がきっかけとなり、学会は2023年に「難聴啓発プロジェクト」を立ち上げました。前述の近藤真彦さんのコマーシャルなどで全国的キャンペーンを現在行っています。

「新潟プロジェクト」を立ち上げた時には全国で8都道県の24市区町村でしか助成がなされておりましたが、2024年8月の時点では41都道府県、362市区町村と助成実施自治体が急増しており、まだまだこの先増えそうな気配です。

まとめ

以上のように、新潟県内の全市町村で補聴器購入費用が助成されます。その制度は3つあり、23市町村では、年齢に関わらず軽度の難聴でも助成がなされます。ただ7市においては年齢制限があり注意が必要です。

難聴はお子さんにとっては言葉の発達や学習の面で、中高年の方にとっては認知症の危険因子の最大のファクターという点で、難聴があれば補聴器を着けることが望ましいと思います。その際には助成制度を是非ご活用いただきたいと思います。

自分で聞こえにくいと思ったり、ご家族のテレビの音が大きいなどがありましたら耳鼻科を一度受診し、聴力検査を受けてみてください。

必要があれば補聴器をつけると、お子さんたちの学習能力の向上、中高年者の認知症やうつ病の予防にも繋がる可能性があります。助成制度を活用して補聴器を積極的に装用し、家庭や社会において快適な日常生活を送っていただきたいと心より願っております。

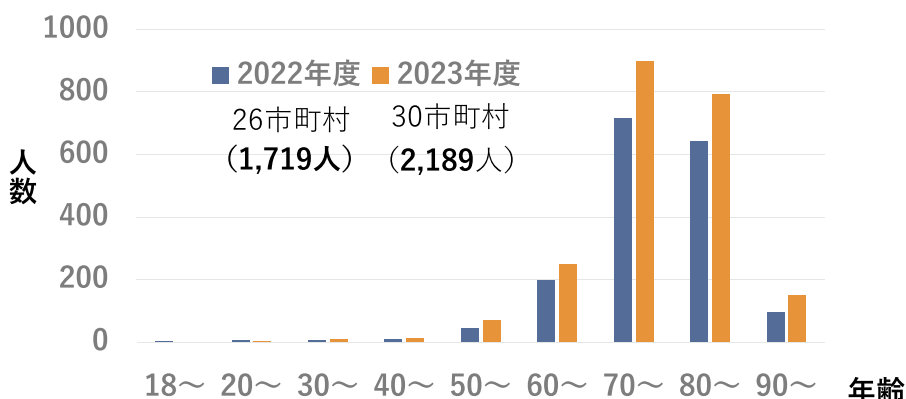


図5 助成を受けて補聴器を購入した人数

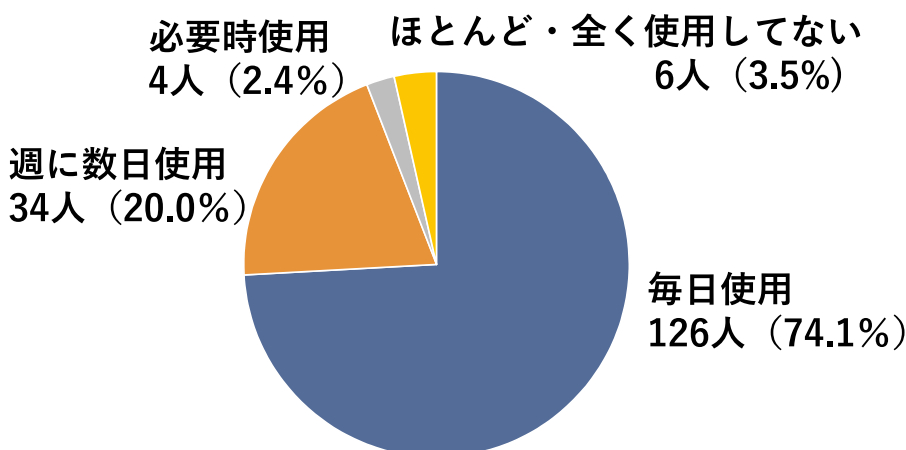


図6 助成後1年目の補聴器使用状況について



こどもの神経発達症(発達障害)について

にじいろこどもクリニック

大橋 伯

1. 神経発達症とは

「発達障害のお子さんが増えている」というニュースを耳にされたことがある方も多いかと思います。実際増えているのか、については様々な意見がありますが、少なくとも発達障害について、社会的な注目が高まっているのは間違いありません。

発達障害は国際的な診断分類であるDSM-5の日本語版では「神経発達症」と翻訳されており、こちらが正式名称とされています。神経発達症は生まれつきの脳の特性によって小児期から認知、言語、社会性などの発達に影響が生じる疾患群です。主な神経発達症として、自閉スペクトラム症、注意欠如多動症（ADHD）、限局性学習症（学習障害）などがあり、それ以外にも知的障害、チック、吃音なども神経発達症に含まれます。これらの疾患は互いに合併することも多いとされています。

今回は神経発達症のなかで、代表的な疾患である自閉スペクトラム症およびADHDについて概説し、早期発見のポイントや小児期の支援について説明したいと思います。

2. 自閉スペクトラム症

自閉スペクトラム症は「コミュニケーションの困難さ」と「こだわり・感覚過敏」により社会生活において困り感が生じている状態とまとめることができます。

コミュニケーションの困難さについては、非言語コミュニケーションとしての「社会性」と言語コミュニケーションとしての「言葉のやり取り」の2つの面で困難さがみられます。社会性の困難さについては、集団活動への参加を嫌がる、他人との適切な距離感を把握することが難しい、などの様子がみられます。また、言葉のやり取りの困難さについては、一方的に自分の気になることを話す、話し合いに参加することが苦手、などの様子がみられます。

こだわり・感覚過敏については、ルーチンを好む、興味の偏り（恐竜とか、昆虫、車、数字など特定の分野に強い興味を示すことが多い）、偏食（味覚過敏）、騒がしいところを嫌がる（音過敏）、服の肌触りにこだわる（触覚過敏）、などの様子がみられます。

以前は言語発達の遅れない自閉スペクトラム症のことをアスペルガー症候群、知的障害を伴わない自閉スペクトラム症のことを高機能自閉症と呼ぶことがありましたが、現在はこれらの区別は用いられなくなっています。

3. 注意欠如多動症（ADHD）

注意欠如多動症は「不注意症状」と「多動性・衝動性」とにより社会生活において困り感が生じている状態とまとめることができます。

不注意症状については、気が散りやすい、忘れ物・なくしものが多い、片付けができない、などの様子がみられます。

多動・衝動性については、じっとしていることが難しい、気になるものが目に入ると走って行ってしまう、順番を守ることが難しい、などの様子がみられます。

4. 乳幼児期における早期発見のポイント

自閉スペクトラム症では診断基準には記載されていませんが、乳幼児期によくみられる行動パターンがあり、早期発見の参考になります。

・寝つきが悪い

乳児期にちょっとした刺激で目を覚ましてしまう、抱っこしないと寝ない、などの様子が見られることがあります。幼児期になっても寝つきが悪かったり、夜間に何度も目を覚ますことがあります。

逆に、乳児期にすごくよく寝て、放っておけばずっと寝ていた、というお子さんもおられます。

・乳児期に手がかからない

自閉スペクトラム症のお子さんの問診をするなかで、「乳児期には全く手がかからない子だった」というエピソードが聞かれることがあります。「人見知りをしなかった」「一人で遊んでいて、親の姿が見えなくなっても泣くことがなかった」など後から考えると自閉スペクトラム症の特性からくるエピソードが、その時点では「手がかからない」と捉えられていることがしばしばあります。

・言葉のおくれ

自閉スペクトラム症のお子さんでは言葉の発達が遅れることが多いです。また、独特な言語発達のパターンを示すこともあります。特徴的なパターンとしては、以下のようなものがあります。

①運動発達は正常だが、言語発達が遅れる

②折れ線型の経過

1歳すぎに発語がみられるようになるものの、その後しばらく発語が消失し、2歳過ぎから再び発語が出てくるといった折れ線型の言語発達パターンがみられることがあります。

③言語発達のアンバランスさ

一般には発語は「ママ、パパ、ワンワン」といった事物名称が最初にみられ、その後「あんよ、ねんね」などの動作語、「あっち行く、ママ来て」など二語連鎖の順で発達がみられます。自閉スペクトラム症のお子さんではこの順に言語が発達しないことがしばしばみられ、最初に話した言葉がテレビのセリフだったり、言葉はしゃべらないが歌は歌う、日本語はほとんどしゃべらないが英語をしゃべるなどの様子が見られることもあります。

一方、注意欠如多動症においても、よくみられる行動パターンがあります。こちらは自閉スペクトラム症の場合とは異なり、中核症状である多動・衝動性に起因するものが多いです。

・切り替えが苦手

家庭生活や集団生活において困っていることの上位に挙がることが多いエピソードです。自宅で遊んでいて、ごはんだよ、とか、お風呂だよ、などと声をかけても、行動を切り替えるのに時間がかかることがよくあります。集団生活でも、1つの活動から、次の活動への切り替えがうまくいかず周囲から遅れてしまう、個別に対応しないと切り替えられないなどの様子がみられます。

・かんしゃく

自分の思い通りにならないことをきっかけに泣きわめいたり、物を壊したり、家族や友達に手が出たりすることが多いです。かんしゃく自体はどのお子さんでも多少なりともみられますが、注意欠如多動症のお子さんでは頻度が多かったり、程度が強かったり、気持ちが落ち着くまでに時間がかかったりします。

・集中が続かない

活動に集中できない、遊びが続かないなど、いろいろな場面でみられますが、特に食事の場面で困ることがあります。食事の途中で席を立ってしまい、何回も促してやっと席に戻るものの、またすぐに席を立ってしまうということの繰り返しで結局食事が終わるのに時間がかかってしまうことが多いです。

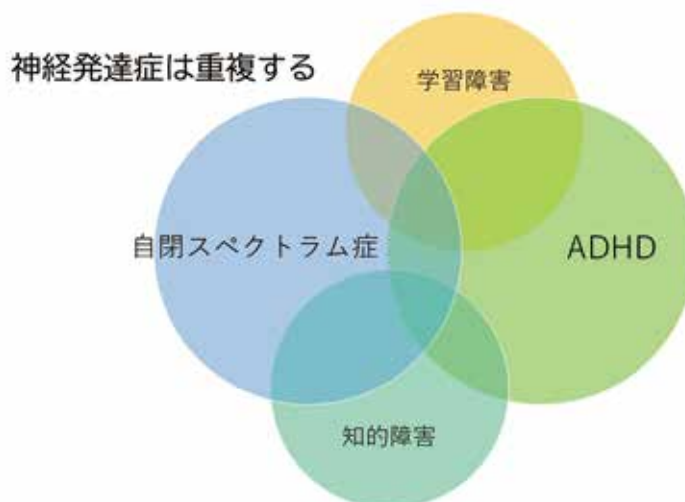


図1

5. 望ましい支援

神経発達症のお子さんに対する支援については、そのお子さんの発達状況や生活環境によって大きく異なりますが、以下のような対応が有効なことが多いとされています。

・「ほめる」対応

特に注意欠如多動症のお子さんで有効な対応とされています。ほめる対応を取ることで、望ましい行動が増え、こどもの自信や意欲が増すことが知られています。ほめる対応のポイントとしては、「こどもをほめる」のではなく、「こどもの行動をほめる」こと、望ましい行動がみられたときに「すぐにほめる」こと、「皮肉を避けて、簡潔に穏やかにほめる」ことが挙げられます。

・見通しを持たせる対応

見通しを持たせることは注意欠如多動症のお子さんでも、自閉スペクトラム症のお子さんでも有効な対応です。あらかじめその日のスケジュールを示しておいたり、「あと5分でごはんだよ」など切り替えの少し前から予告するなどの対応が挙げられます。自閉スペクトラム症のお子さんでは新しい場所やできごとが苦手なことが多いので、あらかじめ下見しておくなどの対応も有効です。

情報を伝えるときの工夫として、「視覚化」が挙げられます。予定をホワイトボードに書いておく、絵カードを用意するなどの工夫のほか、時間を視覚化する目的でタイマーを使用することも有効です。タイムタイマーという視覚的に時間が減っていくのがわかる商品もあります。

・みんなで支えること（連携）

神経発達症のお子さんとその保護者に対して、さまざまな支援制度や相談機関があります。例えば、保育園で個別支援を行うために加配保育者を配置したり、保育園・幼稚園以外に児童発達支援事業所（療育）でお子さんの発達特性に応じた活動を行ったりします。また、相談機関として、発達障害者支援センター（新潟市ではRISE）や相談支援事業所（新潟市ではこころなど）があります。また、地域の保健師も保護者の相談に乗ったり、各支援機関との調整を行います。医療機関ではお子さんの医学的診断を行ったり、状況に応じて投薬治療やリハビリを行ったりします。

ただし、お互いがばらばらに支援を行っていても、適切な支援に結びつかない可能性があります。支援に際してはそれぞれの機関が連携することが重要です。このため、保護者と支援者との面談や支援者会議を開催する取り組みが行われています。

乳幼児健診等のデータから、発達面で気になるお子さんと判断されるケースは10%程度にのぼるとされています。神経発達症のお子さんは皆様の身近におられます。早期の気づきが早期の支援に結びつき、ひいてはお子さんのよりよい発達に結びつきます。今回の記事が参考になれば幸いです。

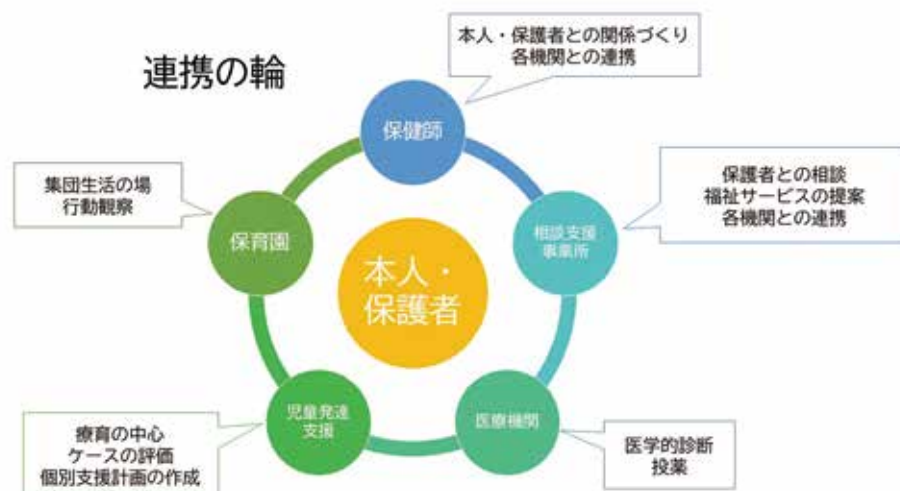


図2



ピンクリボンホリデー2024 開催報告

乳がんで悲しむ人を一人でも減らすため、乳がんの早期発見・早期治療を呼びかけるイベント「ピンクリボンホリデー2024」を、10月20日（日）に新潟日報メディアシップにて開催しました（主催：新潟はっぴー乳ライフ）。毎年ピンクリボン月間の10月に開催している本イベントは、今年も多くの方にご来場いただきました。

基調講演では、新潟市民病院乳腺外科副部長の利川千絵先生にご登壇いただき、乳がん治療の最前線についてご講演いただきました。今年は「家族」をテーマに据え、乳がん体験者に加えて、乳がん患者のご家族によるリレートークを開催し、それぞれの立場からの率直な体験談は、参加者の皆様に大きな感動と、乳がんに対する新たな視点を与えました。続く座談会では、乳がん体験者、患者家族、医療関係者から、それぞれの立場からの意見交換や質疑応答がなされました。参加者の方々は、より深く乳がんについて理解を深めるこ

とができたのではないのでしょうか。

また、ブース出展では、企業によるアピアランスサポートの紹介や患者会による傾聴コーナー、協力団体による健康ブースのご協力を頂き、幅広い取り組みをアピールできた他、午前中にはサテライト会場（にいがた乳腺クリニック）での乳がん検診も実施し、より多くの方に検診の機会を提供しました。

後日、オンデマンド配信を行ったことで、会場に来られなかった方にも本イベントを知っていただくこともできました。「ピンクリボンホリデー2024」は、乳がんの早期発見・早期治療の大切さを改めて認識し、参加者それぞれの行動につながるイベントとなりました。今後も、乳がんに関する情報発信と啓発活動を継続し、乳がんで悲しむ人が一人でも少なくなる社会を目指して活動してまいります。



第39回がん征圧新潟県大会を開催しました

県民の皆様ががんについて正しく知っていただくことを目的に、10月4日（金）ラポルテ五泉多目的ホールで「第39回がん征圧新潟県大会」を開催しました。今年は、五泉市、東北広域次世代がんプロ養成プラン（新潟大学）との共催で開催し、五泉市民をはじめ県内各地より約120名の方からご参加いただきました。

体験談では、（公財）日本対がん協会の大塚彩実さんから、家族や周りの人に支えられながら乳がん治療を乗り越えられた経験をお話いただきました。

また、特別講演では（一社）新潟県労働衛生医学協会 消化器内科統括部長の成澤林太郎先生から「あなたは胃がんになりやすい!？」と題して、胃がんの発生の95~99%はピロリ菌の感染によるものであり、ピロリ菌抗体検査と内視鏡検査を組み合わせた人間ドックや検診を受けることで、胃がんになりやすい人となりにくい人を分けることができることをお話しいただきました。講演の最後には、あらゆる「がん」は早期診断・早期治療が有効であると話され、来場者に検診の受診を呼びかけられました。

機関紙「陽光」発行終了のお知らせ

この度、社会環境への意識の高まりやペーパーレス化推進の流れを受け、本号（第38号）をもって機関紙「陽光」の発行を終了することといたしました。

これまで多くの皆様にご愛読いただき、誠にありがとうございました。

今後は、当財団ホームページ内のコンテンツ『健康コラム』を通じて、専門家による健康・医療に関する最新情報の解説や、健康づくりに関する様々な情報を発信してまいりますので、引き続きご覧いただけますと幸いです。

突然のご案内となりましたが、何卒ご理解を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

表紙画説明



赤花猫柳（あかばなねこやなぎ）

描いたこのモデル、2月雪の中、街のスーパーの店先で売られていました。
“赤花猫柳”の名札がついていました。
猫柳の突然変異と推定されているとの事。
ボンヤリTVを観ていたら昔のドラマなのに、この色の猫柳が玄関に活けてありました。栽培種だと思います。
終わりの頃には普通の猫柳の花序と同じようになりました。

（表紙画 表紙絵 野の花館 外山 康雄 氏）

表紙題字 書家 大矢大拙 氏